

# 看護学生における妊婦体験学習効果

笹野京子, 加城貴美子, 高塚麻由, 阿部正子, 西方真弓, 和田佳子

新潟県立看護短期大学

## Learning Effects of Simulated Pregnancy Experience on Nursing Students

Kyoko SASANO, Kimiko KASHIRO, Mayu TAKATSUKA Masako ABE,  
Mayumi NISHIKATA, Keiko WADA

Niigata College of Nursing

**Summary** The study was designed to show the educational benefits of a simulated pregnancy experience. Forty-seven participating students agreed to wear maternity simulation jackets, yielding the following results.

Subjects described physical changes in pregnant women before and after participating in the experiment. Comparing these descriptions, significant differences were observed in the ratios of physical changes: "bending backward posture", "lumbago" and "stiff shoulders" ( $p < 0.01$ ); daily tasks: "difficulty in carrying out daily tasks," "difficulty bending forward," and "difficulty sitting down and standing up" ( $p < 0.01$ ), and "risk of falling down" ( $p < 0.05$ ); and mentality: "stress from daily life" comments ( $p < 0.01$ ) among the participants.

In contrast to the aforementioned examples, what decreased or disappeared among post-study comments from participants were "edemas" and "uneasiness about deliveries and raising children," which cannot be understood without actually experiencing pregnancy. Apparently, the participants did not feel comfortable giving guidance to prospective patients concerning what they could not actually experience firsthand.

Based on these statistics, this simulated pregnancy experience was effective to a certain extent in helping participants understand the physical changes, changes in carrying out daily tasks, and changes in mentality of pregnant women.

**要約** 妊婦体験ジャケット着用による妊婦体験学習の教育効果を明らかにすることを目的に、研究に同意の得られた47名の学生に学習前後に調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

学生が記述した妊婦の身体的変化の項目のうち、体験後にその比率が多くなったのは「後傾姿勢」、「腰痛」、「肩こり」( $p < 0.01$ )などに有意差があった。日常生活上の変化の項目では「日常生活行動の困難」、「前傾姿勢が困難」、「座り立ちの動作困難」( $p < 0.01$ )、「転倒の危険性」( $p < 0.05$ )などに有意差があった。また、精神的変化の項目では「日常生活上のストレス」( $p < 0.01$ )などに有意差があった。反対に学生の記述が体験後に減少または消失した項目は、「浮腫」、「出産・児に対する不安」( $p < 0.01$ )など体験学習では体験できないことであった。また、学生が記述した妊婦への保健指導項目では、体験学習で得た体験に基づき体験後にその保健指導項目の比率が多くなり、反対に体験できない項目については減少または消失していた。

以上のことから、学生がその体験学習から学び得る傾向を十分理解した上で、看護教育へ導入していく必要があると結論される。

**Key Words** 妊婦体験ジャケット (maternity simulation jacket)  
体験学習 (simulated pregnancy experience)  
母性看護学 (maternal nursing)  
看護学生 (nursing student)  
妊婦 (pregnant woman)

## I はじめに

母性看護学は、「産む」機能をもつ女性を対象に生涯にわたる健康増進・疾病予防とその自己決定への働きかけに関わる看護活動を学ぶ学科目である。特に、妊娠から始まり、分娩、産褥へと女性が母となる過程で生じる生理的・心理的・社会的側面への理解とその看護援助を学ぶことに重点をおき講義・演習・実習が展開されている。しかし、現代の若者である学生は、少子化や核家族化が進む社会情勢の中で身近な妊婦が減少していることに伴い妊婦の理解に必要な生活体験が乏しく、それに伴う想像力の低下があると指摘されている。

このような状況の中、母性看護学領域では、妊婦の理解を深めるための授業の工夫として、妊婦体験ジャケット装着による疑似体験を取り入れた授業が行われ、妊婦体験学習による教育効果として報告されている<sup>1-8)</sup>。その報告では、妊婦の身体的変化を体験できる、日常生活行動上に生じる変化を体験できる、妊婦の精神的変化を体験できる、の3点が妊婦の理解に効果があると述べられている。しかし、研究の多くは学生の体験前の妊婦の理解への調査はなく、妊婦体験学習後の調査でその効果を報告している。そのため体験前後で具体的にどのような違いがあるのか明確でなく効果が曖昧である。

そこで本研究では、学生の妊婦体験学習体験前の知識と体験後の記述内容を比較することにより、学生が妊婦体験学習で得た学習効果を明らかにするとともに、今後の母性看護学の教育方法への示唆を得たので報告する。

## II 研究方法

### 1. 対象

本看護短期大学生2年次生100名中、研究への同意の得られた57名。

### 2. 調査内容

#### 1) 体験前の調査

##### (1) 学生の属性

①年齢、②性別、③身近な妊婦の存在の有無と続柄、④出産経験または出産立会いの有無。

##### (2) 体験前の調査内容

妊娠後期の『妊婦の変化』、『必要な保健指導』で構成した。『妊婦の変化』では、①身体的変化、②日常生活上の変化、③精神的変化。『必要な保健指導』では、①身体的変化に対する保健指導、②日常生活上の変化に対する保健指導、③精神的変化に対する保健指導、について自由記載で回答を求めた。

### 2) 体験後の調査

#### (1) 体験の実態調査

①妊婦体験ジャケットの着用時間、②体験行動。

#### (2) 体験後の調査内容

体験前と同様に『妊婦の変化』、『必要な保健指導』について自由記載で回答を求めた。

### 3. 方法

母性臨床看護学の妊娠期の授業内容が終了した時点で、研究の内容、研究の同意書および体験前の質問紙を全員に配布した。また、研究の主旨と研究への参加に賛同の得られた学生には、翌日までに体験前の質問紙の回答と研究同意書を留置法で回収した。

体験前に質問紙の回答および同意書への署名が得られた学生には、次の授業後に体験方法等について以下の説明を行った。①着用予定表へ自分が希望する着用日に氏名を記入する（学生の希望が集中する場合は、教員が調整）、②着用時間は30分以上体験する、③着用場所は、母子看護学演習室で2人1組で着用し、体験場所は学内に限定する。④体験内容として、演習室内に、日常生活動作を想定して(a)畳と布団、(b)掃除道具、(c)物干し竿、(d)洗面道具、(e)炊事道具、(f)洗濯機と洗濯物、(g)幼児を想定した重さ10kgのぬいぐるみ、(h)爪切り、(i)靴下などを準備した。必須体験動作項目として、歩行、(a)～(f)の動作、階段昇降、トイレ動作を指定した。その他の体験動作は、学生の自由裁量とした。

体験後の質問紙は、体験した翌日に留置法で回収した。

妊婦体験には、株式会社高研社製の妊婦体験ジャケットII型(LM-065)で総重量7.2kgを使用した。

### 4. 期間

2002年11月～12月

### 5. 分析方法

学生の記述した身体的変化、日常生活上の変化、精神的変化、およびそれぞれの保健指導ごとに内容分析

を行った。分析は、研究者全員で行い、研究者間で一致するまで討議し項目に分類した。次に、それぞれの項目を数量化し、体験前後の百分率の差の検定を行った。なお、統計処理にはSTATISTICA'99を用いた。

## 6. 倫理的配慮

学生には、本研究の参加は学生自身の自由意志によるものであること、研究参加の諾否や途中での参加中止が成績評価に影響しないこと、体験前後を比較するため学籍番号の記載が必要であること、およびプライバシー保護の保障について、書面と口頭で説明を行った。また、妊婦体験ジャケット着用による腰部への負担を説明し、学生の身体権への配慮を行った。その上で、研究の主旨に同意した学生から同意書を得た。

## III 結果

回収数（率）は、体験学習前の回答者53名（89.5%）、体験学習後50名（87.7%）であった。本研究では、体験学習前後の両方の回答が揃い回答欄に空白のないものを有効回答した。有効回答は47名（79.7%）であった。

### 1. 対象の属性

学生の年齢は20.2（SD=1.9）歳であった。性別は男子1名、女子46名であった。身近な妊婦の存在は「ある」と答えた学生が11名（23.4%）、妊婦との続柄は従姉妹が最も多く4名（36.4%）であった（Table 1）。出産経験または出産立会いの経験は、全員が「ない」と答えていた。

Table 1. 身近な妊婦 n = 9

続柄	人数	%
従姉妹	4	36.4
姉	2	18.2
友人	2	18.2
叔母	2	18.2
母	1	9.1
義姉	1	9.1

(複数回答)

### 2. 体験の実態

#### 1) 妊婦体験ジャケットの装着時間

装着時間の平均は49.5（SD=12.0）分、範囲は30分

から65分であった。

#### 2) 体験動作項目

体験動作項目は平均7.2動作を実施していた（Table 2）。全員行っていた体験動作は、「歩行」と幼児（上の子）を想定した重さ10kgの「ぬいぐるみ抱き」であった。

Table 2. 体験動作

動作	n	%
歩行	47	100.0
ぬぐるみ抱き	47	100.0
布団上げ下ろし	43	91.5
物を拾う	36	76.6
靴下履き	36	76.6
洗濯物干し	35	74.5
床の拭き掃除	33	70.2
洋服着脱（マタニティドレス）	33	70.2
高所に手伸ばし	32	68.1
布団敷き	31	66.0
爪切り	30	63.8
食器洗い	19	40.4
洗面	19	40.4
階段の昇降	19	40.4
仰臥位で寝る	16	34.0
トイレ（和式）	16	34.0
トイレ（洋式）	16	34.0
買い物（自動販売機）	7	14.9
側臥位で寝る	7	14.9
走る	4	8.5
スクワット	4	8.5
寝返り	2	4.3
四つんばい	2	4.3
デスクワーク	2	4.3
ジャンプ	1	2.1
運動（エアロビ）	1	2.1
あぐらをかき	1	2.1
シムス位	1	2.1
腹臥位	1	2.1
椅子の上上がる	1	2.1

(複数回答)

### 3. 妊婦体験ジャケット着用による妊婦体験前後の捉え方の変化

#### 1) 身体的変化とその保健指導

##### (1) 身体的変化

Table 3 に示すように学生が体験前に記述した身体的変化の項目は、「後傾姿勢」31名（66.0%）、「腰

痛」24名(51.1%)、「頻尿」12名(25.5%)の順であった。体験後の記述で多かった項目は「後傾姿勢」42名(89.4%)、「腰痛」40名(85.1%)、「肩こり」27名(57.4%)「胃部圧迫感」15名(31.9%)であった。体験後に比率が増加した項目の中でも「後傾姿勢」、「腰痛」、「肩こり」、「胃部不快感」、「息切れ・息苦しさ」の5項目に有意差( $p < 0.01$ )があり、「易疲労感」に有意傾向( $p < 0.1$ )があった。反対に、体験後に比率が減少したものでは「浮腫」、「妊娠線」の2項目に有意差( $p < 0.01$ )があった。

#### (2)身体的変化への保健指導

Table 4 に示すように学生が体験前に記述した保健指導項目は、「正しい姿勢の保持」17名(36.2%)、「腰痛予防」11名(23.4%)、「疲労回復」9名(19.1%)の順であった。体験後に多かった保健指導では、「腰痛予防」25名(53.2%)、「正しい姿勢の保持」23名(48.9%)の順であった。体験後に比率

が増加した項目の中では「腰痛予防」( $p < 0.01$ )、「疲労回復」( $p < 0.05$ )の2項目に有意差があった。反対に比率の減少がみられた項目の中では「身体的変化の説明」( $p < 0.01$ )に有意差があった。

#### 2) 日常生活の変化とその保健指導

##### (1)日常生活の変化

Table 5 に示すように学生が体験前後を問わず最も多く記述していたのは、「日常生活行動困難」であった。体験後に比率が増加したものでは、「日常生活行動困難」36名(76.6%)、「前傾動作が困難」23名(48.9%)、「座り立ちの動作困難」23名(48.9%)、「側臥位でしか寝られない」13名(27.7%)、「高い所のものがとれない」12名(25.5%)( $p < 0.01$ )、「転倒の危険」11名(23.4%)( $p < 0.05$ )の6項目に有意差があり、「足元がみえない」17名(36.2%)( $p < 0.1$ )では有意傾向があった。

Table 3. 学生が体験前後に記述した妊娠後期の身体的変化  $n = 47$

	体験前		体験後		
	n	(%)	n	(%)	
後傾姿勢	31	(66.0)	42	(89.4)	**
腰痛	24	(51.1)	40	(85.1)	**
肩こり	4	(8.5)	27	(57.4)	**
易疲労感	7	(14.9)	15	(31.9)	†
胃部圧迫感	0	(0.0)	10	(21.3)	**
息切れ・息苦しさ	0	(0.0)	7	(14.9)	**
頻尿	12	(25.5)	6	(12.8)	
膝の痛み	0	(0.0)	3	(6.4)	
浮腫	8	(17.1)	0	(0.0)	**
妊娠線	7	(14.9)	0	(0.0)	**

† $p < 0.1$ , \* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$  (複数回答)

Table 4. 学生が体験前後に記述した妊娠後期に必要な身体的変化への保健指導  $n = 47$

	体験前		体験後		
	n	(%)	n	(%)	
腰痛予防	11	(23.4)	25	(53.2)	**
正しい姿勢の保持	17	(36.2)	23	(48.9)	
疲労回復	9	(19.1)	16	(34.0)	*
浮腫・静脈瘤への対処	2	(4.3)	9	(19.1)	*
体重管理	2	(4.3)	3	(6.4)	
身体変化の説明	8	(17.0)	0	(0.0)	**
便秘	5	(10.6)	0	(0.0)	

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$  (複数回答)

Table 5. 学生が体験前後に記述した妊娠後期の日常生活上の変化  $n = 47$

	体験前		体験後		
	n	(%)	n	(%)	
日常生活行動の困難	17	(36.2)	36	(76.6)	**
動作が緩慢になる	16	(34.0)	23	(48.9)	
前傾動作の困難	6	(12.8)	23	(48.9)	**
座り立ちの動作困難	4	(8.5)	23	(48.9)	**
足元がみえない	9	(19.1)	17	(36.2)	†
行動に制限がある	14	(29.8)	14	(29.8)	
側臥位でしか寝られない	0	(0.0)	13	(27.7)	**
高い所の物がとれない	2	(4.3)	12	(25.5)	**
転倒の危険	3	(6.4)	11	(23.4)	*

† $p < 0.1$ , \* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$  (複数回答)

Table 6. 学生が体験前後に記述した妊娠後期に必要な日常生活への保健指導  $n = 47$

	体験前		体験後		
	n	(%)	n	(%)	
無理な姿勢・動作	26	(55.3)	40	(85.1)	**
家族の協力の必要性	11	(23.4)	22	(46.8)	**
安楽な姿勢・動作	11	(23.4)	19	(40.4)	†
転倒防止	11	(23.4)	17	(36.2)	
環境整備	0	(0.0)	14	(29.8)	**
ゆっくりと動く・急がない	0	(0.0)	12	(25.5)	**
適度に動く	13	(27.7)	3	(6.4)	**
重いものを持たない	15	(31.9)	7	(14.9)	†

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$  (複数回答)

## (2)日常生活保健指導

Table 6 に示すように学生が体験前に記述した指導項目は、「無理な姿勢・動作」26名 (55.3%)、「重いものを持たない」15名 (31.9%)、「適度に動く」13名 (27.7%)、「家族の協力の必要性」11名 (23.4%)、「安楽な体位」11名 (23.4%)、「転倒防止」11名 (23.4%) の順であった。体験後に記述した項目は「無理な姿勢・動作」40名 (85.1%)、「家族の協力の必要性」22名 (46.8%)、「安楽な姿勢・動作」19名 (40.4%)、「転倒防止」17名 (36.2%) の順であった。体験後に比率の増加があった項目の中では「無理な姿勢・動作」、「家族の協力の必要性」、「環境整備」、「ゆっくり動く・急がない」、「適度に動く」( $p < 0.01$ ) の5項目に有意差があり、「安楽な姿勢・動作」( $p < 0.1$ ) に有意傾向があった。また、「重いものを持たない」( $p < 0.1$ ) は体験後に減少し有意傾向があった。

Table 7. 学生が体験前後に記述した妊娠後期の精神的变化 n = 47

	体験前		体験後		
	n	(%)	n	(%)	
日常生活上の配慮へのストレス	5	(10.6)	22	(46.8)	**
行動意欲の低下	6	(12.8)	15	(31.9)	*
依存的になる	2	(4.3)	9	(19.1)	*
母としての責任と自覚	5	(10.6)	15	(31.9)	*
精神的に不安定	12	(25.5)	8	(17.0)	
児への愛着	2	(4.3)	8	(17.0)	*
出産・児に対する不安	29	(61.7)	7	(14.9)	**

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$  (複数回答)

Table 8. 学生が記述した体験前後の妊娠後期に必要な精神的变化への保健指導 n = 47

	体験前		体験後		
	n	(%)	n	(%)	
不安・心配事への傾聴	36	(76.6)	36	(76.6)	
夫・家族のサポートを得る	14	(29.8)	21	(44.7)	
分娩経過の説明	4	(8.5)	9	(19.1)	
ボディイメージの変化への適応	3	(6.4)	7	(14.9)	
ストレス発散	0	(0.0)	6	(12.8)	*
経・初産婦同士の仲間作り	1	(2.1)	4	(8.5)	
母親・両親学級の受講の薦め	2	(4.3)	5	(10.6)	

\* $p < 0.05$  (複数回答)

## 3) 精神的变化とその保健指導

## (1)精神的变化

Table 7 に示すように学生が体験前に記述した精神的变化の項目の中で最も多かったのは、「出産・児に対する不安」29名 (61.7%) であったが、体験後に7名 (14.9%) と最も少なくなり体験前後に有意差 ( $p < 0.01$ ) があった。反対に体験後に比率の増加があった項目の中で、「日常生活上の配慮へのストレス」22名 (46.8%) ( $p < 0.01$ )、「行動意欲の低下」15名 (31.9%)、「母としての責任と自覚」15名 (31.9%)、「依存的になる」9名 (19.1%)、「児への愛着」8名 (17.0%) ( $p < 0.05$ ) の5項目に有意差があった。

## (2)精神的变化への保健指導

Table 8 に示すように学生が体験前に記述した保健指導項目では、「不安・心配事への傾聴」36名 (76.6%)、「夫・家族のサポートを得る」14名 (29.8%)、「分娩経過の説明」4名 (8.5%) の順であったが、体験後に比率が増加した項目の中では、「ストレス発散」6名 (12.8%) ( $p < 0.05$ ) のみに有意差があった。

## IV 考察

教育における体験学習は、「知る、わかる」のレベルから自らの身体を通して体験することによる「実感できる、実際に感じて理解できる」レベルに到達することを目的に導入<sup>9)</sup> されている。

本研究では先行研究で得られている妊婦体験学習の効果について、体験前後の学生の記述内容を比較することにより、具体的な学習効果を明らかにすることができた。また、母性臨床看護学における妊婦体験学習の導入への示唆を得た。

## 1. 妊婦体験学習から得られた学び

## 1) 妊娠に伴う身体的変化および保健指導への理解

体験後に記述量の多くなった身体的変化の項目は、「後傾姿勢」、「腰痛」、「肩こり」、「胃部圧迫感」、「息切れ・息苦しき」であった。「後傾姿勢」については、体験前から7割弱の学生が記述していた。これは、母性臨床看護学の授業で、妊娠に伴う腹部の増大により生じる力学的な姿勢の変化を学習した直後の調査であったためと考えられる。しかし、体験後には9割の学生

に記述がみられ、感想にも「バランスをとるために自然と後ろに反るような姿勢になった」「段々後ろに反って腰に負担がかかった」など「後傾姿勢」となる状況について具体的な理解が得られたと考えられる記述がみられた。また、その他の「腰痛」、「肩こり」、「胃部圧迫感」、「息切れ・息苦しさ」については、藤田ら<sup>10)</sup>が妊娠後期の妊婦の半数以上が感じる不快症状として列挙しているものと一致している。これらのことから、妊婦体験学習により、妊娠後期の妊婦の身体的変化について理解を深めることに繋がったと考えられる。

身体的変化への保健指導で体験後に記述量が多くなった項目は、「腰痛予防」「疲労回復」であった。藤岡ら<sup>11)</sup>は体験学習による心身の快・不快などの感覚を体験することにより、どのような援助をすればよいかという方法論を学ぶことができると述べている。今回の妊婦体験学習においても妊娠に伴う腹部の増大によって腰痛が起こることが理解され、それにより「腰痛予防」という保健指導の必要性について多く記述されるに至ったものと考えられる。

また、体験前に記述された「身体的変化への説明」、「浮腫」、「妊娠線」、「便秘」が体験後の記述にあがってこなかった理由としては、妊婦体験学習では体験し得ない項目であったことと、体感した症状への予防行動・対処行動へ意識がより強まったことによって記述に至らなかったものと考えられる。

これらのことを踏まえ、妊婦体験学習の導入においては、体験できること、できないことを説明し、さらに体験後、学生の妊婦の理解について再確認をする必要性が示唆された。

## 2) 妊娠に伴う日常生活の変化および保健指導への理解

体験後に記述量の多くなった日常生活の変化の項目は、「日常生活行動の困難」、「前傾動作の困難」、「座り立ちの動作困難」、「側臥位でしか寝られない」、「高い所の物がとれない」、「足元が見えない」の7項目であった。体験後の感想にも、「こんなに日常生活に制限が加わったり、不安や苦痛を感じるとは思わなかった」、「階段昇降は、降りる時に足元が見えなくて怖かった」、「和式のトイレは、しゃがむことができず、どうしたらいいかわからなかった」など驚きや苦痛の表現で記述されていた。今回の体験では、日常生活動作を設定したため、学生が多くの体験をすることで、机上で学んだ断片的知識を自分自身の体験に重ね合わせ、理解に繋げる事ができたものと考えられる。

妊娠後期における日常生活の保健指導項目で、体験

後に記述が多くなった項目は、「無理な姿勢・動作」、「家族の協力の必要性」など5項目であり、特に「環境整備」、「ゆっくりと動く・急がない」など、体験前には考えつかなかった項目を挙げていた。それは今回、畳や布団などの生活の場を設定したことで、生活者としての妊婦を想像できたものと考えられる。

これらのことから、妊婦体験ジャケットの装着を妊婦の日常生活の変化および保健指導への理解に繋げるためには、日常生活を体験できる学習の場を工夫することが必要であると結論づけられる。

## 3) 妊娠に伴う精神的な変化および保健指導への理解

学生がイメージした妊娠後期に生じる妊婦の精神的な変化では、体験後に「日常生活上の配慮へのストレス」、「行動意欲の低下」、「依存的になる」が多く記述されていた。我部山<sup>12)</sup>は、妊娠期の女性の精神的変化として「他人に依存しやすくなる」、「動静の制限により気持ちが内省的になる」、「ボディイメージの変化」、「出産に対する不安や恐怖」などがあると述べており、本研究においても、体験後に、体験学習を通して身体的変化から生ずる精神的ストレスに気づけたと考えられる。そのため保健指導としても体験前には挙げられていなかった「ストレス発散」が体験後の記述がみられたものと考えられる。

一方、体験前に挙げられていた「母としての責任と自覚」、「児への愛着」については、体験後に「身体的な特徴だけでなく子供がいるということで心理的な特徴にも触れられた気がした」、「ジャケットを着用しているうちに子供を守る母の気持ちなどを感じて幸せな気分を味わえた」と妊婦への共感的な記述がみられた。それは体験した学生の多くが女子学生であったことや、腹部の大きさや重さを体験することにより、想像が膨らみ妊婦の精神的な理解が深まったためと推測できる。このことは、先行研究<sup>13~15)</sup>と同様に、肯定的な対児感情や母親となる自覚が芽生えたと考えられる。しかし、この妊婦体験学習では、学生自身が妊娠初期から後期にかけて体験する心理過程を体験し得ないために、保健指導の記述量の変化に至らなかったと考えられる。

## 2. 母性臨床看護学における妊婦体験学習の導入への示唆

### 1) 妊婦擬似体験学習参加への導入

体験学習は、学習効果がある反面、学生の心身への侵襲が問題点として指摘されている。例えば上田ら<sup>16)</sup>

は、学生自身が様々なモデルになりきることで、学生自身の身に危険性が伴ったり、あるいは人権にかかわることが出てきたりすることを、強制力のある全員参加が原則である授業として行うことは疑問があると述べている。本研究では、研究目的で調査を行い、学生の自由参加という形式でおこなった。また、体験学習の時間を30分以上という指定をしたために学生の多くが放課後を利用していった。その結果、妊婦体験学習に参加した学生は全体の50%前後であった。妊婦体験学習は、体験学習の中でも学生への侵襲は比較的少ないもの<sup>17)</sup>として挙げられている。しかし、身体への負荷がないとはいえ、腰痛への配慮、装着時間の設定、体験動作の項目への配慮が必要と考えられる。今後、教育の一環として体験学習を取り入れる場合には、学生の人権を尊重した設定を前提としつつ、より多くの学生が主体的に妊婦体験学習に取り組むことができるような工夫をする必要があると考えられる。

## 2) 体験動作の設定

今回、体験動作については、必ず体験してほしい動作を必須動作として指定し、それ以外の動作は自由裁量で体験する形式とした。その結果、体験した動作項目は多種にわたっていたが、反対に必須動作として指定した項目で、全員の学生が体験したのは「歩行」のみであった。特に実習室外で行う階段昇降、トイレ動作で体験は34%と低い率となった。これは学生に必須動作への意識付けが十分でなく、自由裁量という意識のみが強く残ってしまったことによると考えられる。このことより学生の体験動作の設定においては必須動作のチェック項目を設けるなどの工夫が必要であると考える。また、学生の記録にも「もっといろいろなことを経験してみたかった」という記述も見られることから、今後は、さらに多くの日常生活体験や社会的行動が体験できるように学外での実習も組み入れ、幅の広い体験ができる工夫も必要であると考えられる。

## 3) 妊婦体験学習の母性臨床看護学実習への導入としての位置づけ

本研究では、産科外来実習を含む母性臨床看護学実習に出る前の妊婦の理解への導入として、妊婦体験学習を位置づけている。しかし、体験学習から得た結果は、あくまでも学生個人の主観的認識であり、感じ方、受け取り方にも個人差があり、体験したことが先入観となってしまうことがある<sup>18)</sup>という指摘もある。また、小川ら<sup>19)</sup>も妊婦体験学習だけでは、妊婦の「人間的な存在」への配慮が阻害される危険性を指摘してい

る。このように、妊婦体験で得た学びと実際の妊婦の理解との間では、多少の乖離があると推測される。今後、この妊婦体験学習で得た学生の主観的認識が、個人の単なる主観や先入観で終わるのか、または、時間を経て学生の中で熟成するのかを母性臨床看護学実習終了後に追跡調査を行い、再度妊婦体験学習のあり方を検討する必要があると考えられる。

## 研究の限界

本研究では、「妊婦の看護」講義の終了後に体験前のアンケート調査を行い、妊婦ジャケット着用の疑似体験直後に体験後のアンケート調査を行うという設定で調査を行った。そのため学生の妊婦体験が2ヶ月間におよび同一時期でなかったこと、また、学生が必須動作を体験することを十分理解していなかったことなど、同一条件にできなかったことに研究の限界がある。さらに、対象が本学の短期大学生の一学年のみであることから一般化するには限界があると考えられる。しかし、看護学生の妊婦体験前後を比較することは、体験学習の効果をみる上で有用であると考えられる。今後さらに妊婦体験の研究を積み重ね効果的な教育のあり方の検討をしていく必要がある。

## 結 論

今回我々は、妊婦体験前後で学生の記述内容を比較し、妊婦体験で得た学習効果を明らかにすることを目的に調査を行い以下の結果を得た。

1. 身体的変化では、体験後に「後傾姿勢」に伴い出現する「腰痛」「肩こり」や、「胃部圧迫感」「息切れ」などが体験後に多くなっていた。
2. 日常生活の変化では、腹部増大による身体変化に伴い「日常生活行動の困難」「前傾姿勢困難」「座り立ちの動作困難」「高いところの物が取れない」「転倒の危険」が体験後に多くなっていた。
3. 精神的変化では、「日常生活上のストレス」が体験後に多くなっていた。
4. 保健指導では、体験前にあり体験後に消失したものと、体験後に初めて記述された項目とがあった。
5. 身体的変化、日常生活の変化、精神的変化では、体験前には記述されていたものの中で、妊婦体験で体験できない項目については、体験後に減少または消失していた。

以上のことから、学生が体験学習から得る傾向を十分理解した上で、看護教育への導入を考慮していく必要がある。

(本稿は第44回日本母性衛生学術集会で発表したものに加筆・修正したものである)

## 謝 辞

本研究を行うにあたりご協力くださいました本学学生の皆様に感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 島田紀膺子, 清瀬みき子, 藤野敏則ほか: 模擬妊婦体験による看護学生の母性性の形成, 鹿児島医療技術短期大学部紀要, 6, 163~173, 1996.
- 2) 藤本栄子, 黒野智子, 谷口通英: 妊婦理解のための授業の工夫 擬似妊婦体験学習と妊婦参加によるグループ討議の効果, 聖隷クリストファー看護大学紀要, 5, 51~65, 1997.
- 3) 石山さゆり, 村瀬貴美子, 牧 佐奈江: 学習に対する主体性を引き出す試みー内発的動機付けに妊婦体験学習を試みてー, 1(1), 8~13, 1998.
- 4) 大槻優子, 太田 操: 看護学生における妊婦疑似体験学習の効果ー妊婦ジャケット着用前後の対児感情の比較からー, 順天堂医療短期大学紀要, 10, 41~47, 1999.
- 5) 小川久貴子, 峰岸まや子, 李 節子, 牧田眞佐美, 久米美代子: 妊婦体験ジャケットを用いた疑似体験学習, ベリネイタルケア, 18(4), 367~381, 1999.
- 6) 二瓶良子, 窠伊久美子, 小笹由香, 梶原祥子: 妊婦疑似体験学習の有効性に関する検討, 東邦大学医療短期大学紀要, 14, 12~22, 2000.
- 7) 濱口美幸, 池田浩子, 宮崎つた子, 寺田香里, 我部山キヨ子, 母性看護学における妊婦体験学習の効果, 三重大学看護学会誌, 3(2), 33~40, 2001.
- 8) 小川久貴子, 山口栄一, 久米美代子: 擬似妊婦体験学習と産科外来実習で学生が得た妊婦理解の違い, 日本看護学教育学科誌, 11(3), 25~32, 2002.
- 9) 藤岡完治, 野村明美: わかる授業をつくる看護教育技法, 133, 東京, 医学書院, 2000.
- 10) 藤田八千代, 村山郁子, 田間恵実子, 我部山キヨ子: 臨床助産師必携 生命と文化をふまえた支援, 78, 医学書院, 東京, 1999.
- 11) 藤岡完治, 野村明美: 前掲書9) 134.
- 12) 我部山キヨ子: 妊娠と心身の変化 妊婦の意識の変化 母性意識の確立, ベリネイタルケア, 13(1), 31~40, 1994.
- 13) 大槻優子, 太田 操: 前掲書4) 41~48.
- 14) 二瓶良子, 窠伊久美子, 小笹由香, 梶原祥子: 前掲書6) 12~22.
- 15) 島田紀膺子, 清瀬みき子, 藤野敏則ほか: 前掲書1) 163~173.
- 16) 上田賀子, 福田文子, 中谷澄代, 他: 看護技術の学習効果を考える 体験学習で学生が学んだこと. 看護教育の研究, 4, 16~23, 1986.
- 17) 成田伸, 石井トク: 授業研究「体験学習の文献考察, 看護教育, 34(2), 91~100, 1993.
- 18) 藤岡完治, 野村明美: 前掲書9) 144.
- 19) 小川久貴子, 山口栄一, 久米美代子: 前掲書8) 25~32.